H・Rだより

H. R. 10

H・R10には
追分で救急車に乗った人がいます。
八千円のポンコツオートバイを買った人がいます。
授業中、やたら叫び声を出す二人組がいます。
家でも寝る人がいます。
ヤゲンブラといっしょに帰る人がいます。
藤尾先生を好きな男子生徒がいます。
ある部分の毛をそってしまった人がいます。どこでしょうね？ヒッヒッヒ。　！だ毛ねす、カバ
こういうやつらがいたにもかかわらずH・Rはパッとしなかった。授業中はウソみたいに静かなのに、休講の時のみんなのはしゃぎようったらないね。その時のみんなの笑顔をフジカラーでビュ―ティフルに撮っておきたいよ。まったく。
――H・R10をMASHの野戦病院のようにしたかった男。
LE・CON・VOUS！（くたばれ）

H. R. 11

舌足らずのH・R11論　　TOMMY

なしてこの級（クラス）には、かくも珍しき人間が数多く存在するのであろうか。歌謡大行進に支那の夜で一等になった男の子や、お尻振り振りして学校へ来る女の子、タバコを吸って癌の恐怖におののく野郎、ボーリングに命をかける玉のような女の子。H・R日記を見ますれば、個性丸出しの文字と文章が飛びでてきて、H・R11の人が常人でないことを示しており、男子の少数はおよそ文学とは呼べぬ代物（しろもの）を書いて喜んでいます。しかし、ほうむるうむじゅういちという語感は聞く者を童話の世界へ引き込み、荒涼とした都会人の心のオアシスとして、永遠に滅びることなく、青学の生徒に語り継がれていくでしょう。H・R11に栄えあれ!!おわりです。

H. R. 12

四月に入学してからもう十ヵ月過ぎ去ろうとしていますが、今だ、どんなクラスだかわからないのです。ただ、やっぱり、あんまり、そう……まじめじゃあないかもネ。担任の仁彰先生の英りは、脱線が多く授業の遅れは、学年トップです。古文は昼寝の時間、数学だって午後の授業が多いから寝てる人が割りと多い（ただし先生の大声で目をさます人もいる）。生物も地学もうるさいし（今年の一年は特にやかましいという話）、けれど、英文法の

時間は、ものすごくまじめで全員予習してくるのです。でも我々には、ツンボでメッカチが多いとか？……。
しかし（これからよいことを書きます）我々H・R12の連中は、担任をはじめ悪い人間がおるだろうか、いやおりますまい。それぞれの個性は大きく異なっても、何か良い所があるはずです。我々はそれを見いだすため日夜努力を続けていく必要があるのです。H・R12のために。きょうもあすもそしてずっと。

H. R. 13

わがホームルーム13はものにたとえるならば、動物園みたいなものである。猿もいれば豚もいる。きつねもいればくまもいる。それがみんないつもわいわいがやがややっとる。またそれぞれがおりの中にいるように、ホームルームの時は、ばらばらにくらしとるようだ。しかし昼休みの男子はちがう、みんな一致団結してベースボールにとりくんどる。今や中日のヨナミネさんも驚くというまさである。この前なんかオリオールズの選手がきていっておった。「オー！ジスイズジャパン！」というのは少しおおげさだが、みんな熱心である。
またみんな授業の時などはすごい。下を向いてせっせと書いていると思いきゃ、せっせとスリーピングにはげんでいるのである。みんな昨晩はおそくまで勉強したのだろう（じつは11PMを見たのかもしれない）。わがH・R13はそういうがり勉や天才・秀才のいるクラスなのだ。信じないやつは死刑だ。

H. R. 14

このクラスには変わった人たちが大勢生活していて、わかりやすく言えば、体型的に正常を欠いているのですが、つまり個性の強いクラスなのです。しかしクラス全員おとなの持つイヤラシイ汚れた心は露ほども知らず、みんな純粋で幼稚でぬけているのです。客観的によ――く見るとこのクラスはだいたい男と女の二種類に区別できますが、H・R14の男子の男性的魅力と女子の大和撫子的優しさ、そしてその知性美あふれる容姿は高等部の歴史始まって以来の冗談であるのです。しかしなんと言っても全学年を通してこれほど英文法のできるクラスはまずないでしょう。定期試験におけるその学力優秀度は職員室では話題の花であります。そしてここで忘れることのできないのは、このクラスを統率していらっしゃる沢田隆先生の力量あふれるそのお顔とご苦労です。先生のもとに私たちは日夜勉強に励み、学問の神髄をきわめようと努力を重ねているのです。
かの有名な、田中組四十七人衆（詳しく言うと四十六人――アメリカへ行ったカワイーイ女の子がひとりいるため）は、みんなそれぞれ、クラブに勉強にとガンバリにガンバリ抜いておるのでございますが、どうしたわけか、正直言って、クラスのまとまりのまったくない、メズラシーイ、クラスなのでございます。
また、このクラスは、何を隠そう、美男・美女の集団と、いつの間にか、化（か）していたのでございます。学年はおろか、

H. R. 15

高等部全学年を通して、一番ではないかと考えておるくらいであります。まったくの話、うちのクラスへはいってきた、ほかのクラスの人などはみな、恐れおののいて、クラスへはいったとたん、ベルが鳴ったせいかも知れませんが、すぐに帰って行ってしまうのであります。最後に忘れてならないのが、担任の田中昭雄大先生なのであります。先生のお顔の美しさと言ったらなんと言っても、「アイシャドウ・ダヌキ」でありんすえー。

H. R. 16

一時間目のチャイムが鳴る。あわてて飛んで来る者や、さっそくとばかり宿題をやっている者、白けている者と大勢で教室はごったがえすが、先生がいらっしゃいますと授業をまともに受けるのです。休み時間は勉強のこと、遊びのこと、車のこと、くだらないこと、男女のうわさ話(男子の間ではいちばん人気のあるおしゃべり)など。三時間目が終わるとあさましく(なかには彼女みたいにおしとやかに)お弁当を食べているのを男子は横目でチラ、……。五・六時間目、最も努力を要する授業、眠らないようにしなければと思ってもついウトウトしている人もなかにはいるようだ。こうしてわがH・R16の若き可憐な乙女、美少年(なかにはそう思えない人が多いという現状であるが)たちの繰り広げる舞台に幕は降りるのである。あすへと向かって……。

きょうも休講があることを祈りながら、一時間目のチャイムは春夏秋冬多種多様に鳴っているのである。

H. R. 17

H・R17のご紹介にああ、ショーカイなんて言わないで読むのだ。

あいうえ、いつでも**お**お騒ぎ
かきくけ、**こ**の道一筋まっしぐら
さしすせ、**そ**うじはさぼりっぱなし
たちつて、**と**もだちといつまでも
なにぬね、**の**んびりやろうよ、どこまでも
はひふへ、**ほ**んとにここは楽園だ
まみむめ、**も**のみな美しく
やいゆえ、**よ**ろこびあふれている
らりるれ、これからもがんば**ろ**う!
われらがH・R17**を**
とわに忘れずさようなら**ん**

H. R. 18

"H・R18ソング" 節は君たちの才能によるノダ!!

1. 花の東京の真中の、その名も高き青山で
選び抜かれた美男美女、人もうらやむその美貌
鼻にもかけず、かけられず、勉学一筋歩み行く
しかし世間はままならぬ、越すに越されぬ平均点

2. ホレちゃならないあの子にホレて、
浮気なあなたに恋をした。
英語と数学習いもするが、一人で知った恋の道
子持ちの哲っちゃん、あなたが哀れ。

(我等が担任　山田哲雄氏)

3. イエスの御心(みこころ)そのままに、18クラスは今日も行く
いばらの道を歩み行き、心も顔も傷だらけ
今日も夕陽を背にうけて、18クラスよどこへ行く。

——完——

H. R. 19

ホーム・ルーム19とはまったく平凡で典型的なクラスである。ただお勉強が少しできて、体育の先生に、「おまえら少し鈍いぞ」と言われたところがチト違うくらい。朝は授業が始まる寸前にほとんどの連中があわてて教室の中にはいってくる。テストがあったり宿題が出ていたりすると少し早く来て「見せて、見せて!」だの「ここわかる?」などという声がたえない。授業中はまじめに勉強する連中や、「一見勉強しているようで実はマンガかイネムリ」とか、堂々とマンガを読んでいる大胆不敵な奴もいる。その他さまざまな内職がはやっている。

休み時間。ほとんどの連中が疾風のごとく消え去る。目的地は一致しており、たいてい三河屋か高等部の食堂である。

でもH・R19は比較的マジメ、ハデなシャツやネクタイなんか珍しくないが、服装違反はほとんどしない。マァ一口に言えばゴーイング・マイ・ウェイ的なクラスである。

H. R. 201

"おはよう" と声をかけあう友の声に、顔に、私たちは風光る五月を、さわやかな夏の朝を、そして恋をしたり青春を考えたりする十七才の意気を互いに感じあってきたものです。なんの変哲もないクラス。突拍子もないことがおこるわけでもなく、大爆笑がおきることもないクラス。しかしともに過ごす日々を重ねていく間、知らず知らずのうちに、一つのHOMEを築きあげていたのです。ひとりの父親がいる。そしてどこが中心ともなく、ひとりひとりが次々に集まって大きなスクラムを組んでいたのです。背中をむけられていても、輪のいちばん外側にいても、互いに感じることのできる信頼のあたたかさ——。

なんの変哲もないクラスです。しかし、平凡な中に喜びを積み重ねていく——そんな道を一歩々々着実に歩いているのです。

H. R. 202

H・R201今、熟しきって出ました。

なんて書こうか、なんて考えてもちっとも書けない、それほどおとなし〜いH・R202の四十四人です。授業中だって起きているんだか寝ているんだかわかんないほど静かで(もちろん後ろのほう)、先生が何をいってもちっとも笑わず、ある時珍しく笑ったら、大村先生が「むりに笑わなくてもいいんですョ」とフテクサレタ、という伝説もあるくらい、ニヒルなクラスなのです。

それでも修学旅行中はなぜかノッて、末広先生中心に、頼

もし〜い男子十三人と、優し〜い女子三十一人（何か文句あるか？）のステータスが確立、けっこうギャーギャー、ピーピー騒いで、阿蘇に飛び込んだ人も、高崎山で引きとめられた人もなく（あぶない人もいたような）無事に戻ってきました。そして旅行からこっち、けっこうウチワで楽しくやっています。そのうちもっともっとのるクラスになるのでは？と先がとっても楽しみなクラスなのデース。

ぼくたちのクラスはほんとうはみんなおとなしい(?)でも、みんながあつまるそこにはまあるい輪ができて、じきに会話が教室からあふれてしまうのです。

ぼくたちのクラスの担任は、礼をするとき、やたらとうるさい。でも、その下で礼儀正しい生活がどんどん生まれているのです。

H. R. 203

ぼくたちのクラスでは、担任が二十五年のお祝いだといって、何かをみんなでプレゼントする。おもいやりのある生徒をもって先生は幸福だ(?)。そこは「断絶」なんてものにまったく出会わない世界。

ぼくたちのクラスの教室は三面が窓。時々、鳩が窓ごしに翼を休めにやってくる。ここは三階なのにまだ高い銀杏の木の金色の葉っぱが風といっしょにおどり込む。太陽の泳ぐ青空がいつでもさっと見わたせるクラスです。

H・R 203は青春のまっ盛り。

H. R. 204

わがクラスの長所は、チームワークのよさであり、欠点は、調子のよさであろう。前者は、たとえば、時間になっても、その学科の先生が来ない時、窓をしめきり、全員この時ばかりは静まりかえり、だれかひとりが別の学科の本を朗読する。（もっとも、遅れて来た先生が、勘違いをして引きかえすというほど好成績はあげていないのが残念。いつも四十五匹の子羊の願いはむなしく破れているわけである。）また、後者は、この文才のない私ごときにこれを強制的に書かせたというところからしていい例である。でもまあ、それだけにみんな気軽で、明るいよい子のクラスと言える。そしてそして、担任は、スマートでハンサム、勤勉でカッコイイ、ヘアースタイルバチグンの高柳氏である。そう！わがクラスは、トシロウチャンと子羊たちできょうも楽しいH・R 204なのだ！。

H. R. 205

わがクラス、ホーム・ルーム205は、すばらしい運営委員を筆頭に他の委員が力をあわせ、活発に活動しているように見えるであろう。――実に、運営委員のかげの苦労がしのばれるのである。

あまり有名人のいないクラスではある。しかしながら、男子はスポーツマンで柔道がうまくて、勉強ができるかどうかしらないけど頭がきれて、おもしろくって、欠点だらけの美少年がそろっており、女子は頭がいいのはもちろんのこと、しとやかで愛らしい美少女ばかりである（白々しい）。

そして男女はとても仲がよく、数多くのカップルが誕生している。全部紹介したいのだが、あえてワンカップルだけお聞かせしておわりにする。ロッテさんと柔道くんなのだ。これはわがクラスが自信をもってお勧めできる(?)カップルである。これではわからんやろ、だけどバラすとあとあと恐ろしいからね。参考までに書きまっけどな、実はわても柔道やってまんのや。

H. R. 206

ご拝眉の上、ごあいさつ申しあげます。私ども、H・R 206のクラスは、いつも麗々しく、粗漏のない本当に欠点のつけどころのないプラザでございます。クラスのムードも、木戸御免的ムードが限りなく拡がっており浮世ばなれしております。男子は、皆それぞれにさまざまな野望を抱き、未来に生きるたくましさを持っておりますし、また女子には、しとやかな、あるいは私もあこがれてしまいそうなたくましい沈魚落雁がいっぱいでございます、ハイ。それに修学旅行のおみやげによさそうな鹿児島の農産物もみごとに実を結んでいるのでございます。それは、それは皆さん、五体満足な者ばかりでございます。イエ、イエ、決してこれは曲筆ではございません。まったく誠のことでございますよ、ハイ。マァとにかく一度、ご訪問くださいまし。私どものクラスの炉辺談話は、皆様をすぐに魅了してしまうことでございましょう、ハイ。言っときますが、私はこれでも男でございます。

H. R. 207

私たちのクラスは二つに分裂しています。けれど、すごくまとまりのあるクラスです。それは、どうしてだと思いますか。そう、もちろん担任の先生、大ベテランの綿引静枝先生がいるからです。いつも、にこにこしている先生は、私たちの心のやすらぎになるのです。ホーム・ルーム207のホープといったら、生徒ではなく、もちろん彼女、綿引先生なのです。こんなに良い先生に恵まれた私たちは、たいへん幸せです。先生なしでは、わがクラスは、つまらないものになってしまうでしょう。先生は、何にでも協力してくれます。文化祭の仮装行列だって、修学旅行の時だって、いつも自分が生徒になったと思って、協力してくれるのです。先生のことばかり述べてしまったのですが、それでいいのです。わがクラスの特徴は、彼女の特徴とイコールで結べるからです。わがクラスは、二つに分かれていると述べましたが、先生の性質に裏表があることを、印しているのだと思います。

H. R. 208

四月の初め、なんと静かでいいと錯覚したクラス。よく考えてみたら男子の数が半分で、午前と午後の顔ぶれが違っていたという傑作な出発。五月〜九月そして今、とってもにぎやかなクラスに華麗なる変身!?青学一楽しい授業が聞きたかったらH・R 208へおいでといいたくなるほど。どの先生にも「このクラスで授業すると疲れる」と言わせるほど熱心な？授業態度。そのせいか先生

も三度続けて同じことを注意する熱の入れよう。ついには熱心過ぎて担任にたしなめられ、そのトキの一声？が学校中に響きわたり、当然、生徒の間でも、先生の間でも、とっても有名になったクラス。

悪いクラスだと人は言うけれど
いいじゃないの幸せならば

そんな感じがぴったりくるクラス！　これぞH・R208！

H. R. 209

お初にお目にかかります。私メは、H・R209の天井裏に住むネズミでございます。このたびなんの因果か、この晴れがましい場で一席ぶつハメになりましたので、これからぶたせていただきます。

毎朝、チャイムとともに死にもの狂いの一団がなだれこんでまいります。天井裏まで響いてくるそのすさまじさに私メはいつも必死の思いで柱にしがみついております。授業中の事をお話しするには、昔からあることわざを引用させていただきます。「沈黙は鐘なり」指名されたら沈黙を守りチャイムまでの時間を稼ぐべし、なのでございます。休み時間になると、ひとりのアイドルが絶大な人気を誇っております。それは私メの目から見ますと、黒い色をしてハートの先にシッポのはえたような形のものなのでございますが、皆様は、それをオールマイティーとか言って尊重していらっしゃいます。

これで私メは天井裏へもどらせていただきます。

H. R. 210

こんなぼくに、H・Rの紹介をさせるなんて、運のつきだもんね。モロアバクモンネ。私たちはきれいな米田先生の指導のもとに、日夜くまなく、お勉強。休み時間でも教室からは一歩も出ず、三文字へ行きたくとも勉強のじゃまになるといけないのでがまんをし、授業中はいびきの音がきこえないのが不思議なほど、静かで、先生の声がこだまとなって、頭上をいきかい、こだまが頭にあたってけがをした人もいるそうです。H・Rの時間はみんながクラスのことをしんけんに考え、友情はどんな百科事典よりもあつく、そのあつさといったら、広辞苑より少しあつい ぐらいです。教室の清掃はいちょうのはっぱの車がきたあとよりはずぐっときれいです。私たちがあまりりっぱすぎて他のクラスの迷惑にならないかと心配です。米田先生はこんな私たちを毎日ほめてくれます。と、まあ毎日、まぼろしを見ている次第でありますです。ハイ。

H. R. 211

彼は、ただひとりこがらしの吹く中を、どこまでもまっすぐのびた枯れ葉のじゅうたんの上を歩いて行った。少し行くと小屋があった。扉は風で音をたて、落ちかかった看板には「花」と書いてあった。彼はなにげなく空を見あげた。そこには厚い灰色の雲が低くたれこめていた。彼は店の中にはいった。中は薄暗く、荒れはてていて、あるものと言えばこわれかかった棚とその上に散乱した数十個のタネだけだった。彼はそれらのタネ一つ一つ

を手にとって五分も十分もただ見つめているだけだった。外も薄暗くなったころ、彼はようやくそこを出た。数十個のタネを持って……　そしてあたりを見まわし、少し歩いてから土の上に膝をつき、それらのタネを植えはじめた。あたりにはだれひとりいない。最後の一つを植え終わると彼は立ち、コートのえりを立て、ポケットに手をつっこんで、闇の中へと消えて行った。空には数個の星がにぶい光を放っていた。

H. R. 30

黒髪ながき十八才
人恋ひそめし初めなり
恋ひしき君はわが師とあおぐ
しょせん実らぬ恋だもの
丈なす髪を断ち切るも　君恋ふ心断ち切れず
空しき月日重ねきて
歩む憂世のさびしさに
つもりつもったノイローゼ
成績表には一の字の
赤い花に悩まされ
ここまできたのは不思議なくらい
これもひとへに皆々様の
あれやこれやの助け舟
舟は出て行く我らも巣出つ
緑ヶ岡よありがとう　H・R30よありがとう

H. R. 31

つい先日まで　黄色い扇のような葉をつけていた公孫樹並木も、今ではただ閑散としている。　黄色い扇は一年間の想い出とともに舞い散ってしまったのである。今年の冬は早い。コートのえりをたて、足早に公孫樹並木を歩きぬける人々を、冬の匂いを含んだつめたい風が追いたてる。……もう師走だな。……そんな感じを街は人々に伝える。俗っぽい街のクリスマスの装いが人々を包みかけるとき、私たちは考えはじめる。まもなくおとずれる別れを。我々はこの二年間、五十人足らずの小世界を作っていた。その小世界に何かを見いだし、その小世界がゆえに生きてきたかのような二年間、しかしそれも終わる。ちょうど公孫樹か、あるいは種々の樹が芽をふくころ、私たちは小世界からそれぞれの世界へと追いやられてしまう。それぞれの世界に。しかし、この小世界は生き続けるであろう。いや絶対にそうなのである。そしてみんないつかまた、ここに舞いもどるのである。

H. R. 32

春はあけぼの。やうやう暖かくなりゆく、三十二のやわらかき机より、ふと顔をあげぬれば、終業の鈴のきこゆる。

夏は夜。八月のころはさらなり。追分にて夜、果物籠球などするはいとをかし。補習などするもをかし。

秋は夕暮れ。進学のときいと近うなりたるに、日頃、遊びなれたる人の勉強するとて、辞書など持ちて歩くさへあはれ

なり。まして仮装にて、月光仮面などをするはいとをかし。
冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。学び部屋のいと寒きに、蒸気暖房装置のカッチョンカッチョンなるもいとつきづきし。また白き息を吐き、三十二に走りこめども師のすでにきたるのは、恥づかしげになりてわろし。
清少納言――生没年未詳、随筆家。歌人。清原元輔の子。
枕草子――随筆集。約三百段から成る。本文は、光陰のために清少納言が書き下した、第一段の前の段である。

H. R. 33

鞍馬天狗と四十五人の善男善女たちで編成されたその名も高きわれらがH・R33の若者たち(馬鹿者たち?)は、夜も寝ずに昼寝してきょうの授業の復習、あすの授業の予習をし、授業中には先生から質問があれば我さきに!とクラスのみんなが手をあげ、試験中においてでさえも礼拝中は一言も発しない。以上のようなことは決してないわが青山学院高等部の最も平均的なクラスであります。これといった特徴もないのでみんなに聞きますと、
男A「昔なつかしい男らしい男と男らしい女の集まり」
女A「昔なつかしい女らしい女と女らしい男の集まり」
男B「クラスでキリギリスを飼っている」
女B「おもしろいクラスだわ」
男C「小生には、わからないですネ」
女H「そうは、言わんのですワー?」

H. R. 34

質問　ホーム・ルーム34を一口に言うと?
池田先生→ウッフ、ンー、マァ、ダンダンヨクナッテキテハイルワネ。ア、コンナコトカイチャダメヨ。
萩原先生→ソウネ、ヒトクチニイウトネ、イロイロノヒトガイルカラネ、ヒャッカリョウランテコトダネ。アンタ、リョウラントイウノ、ジショヒキナサイ。
(影の声→さすが国語の先生、言うことが違うわ)
我らが担任・八下田先生の、みことば→ウーン、ショウセイ、トテモマンゾクシテルヨ。コレトイッタノイナイケド、コノクラスハビジンガオオイダロ。(影の声→いったいだれの事だ。先生そろそろ眼鏡かけたほうがいいョ)ソウオモワナイカ?(影の声→全然思わない)ダンダンマトマッテキテルヨ。ウン。セワガヤケナイモノネ。ホカノセンセイニウラヤマシガラレルヨ。イヤ、マッタク。(影の声→〝親バカ〟というか〝住めば都〟というか昔の人はうまいこと言ったものだ。)

H. R. 35

おや、北校舎の左端に、また教室がありますよ。どんなところか、ちょっとのぞいてみましょう。あっ、おなじみの落語家に機関車の運転手、校医にアナウンサー、司会者もいますよ。それに将棋までおいてあるし、そういえば、CM映画会社もありますよ。ここは勉強部屋でなくて、職業人の集いの所のようです。でも、鉄人29号があるし、みんなかわいいから、まるでおもちゃ箱みたい。あっ、カメさんがいる。森もあるし、林もあるし、公

園みたいです。戸の所にだれかいらっしゃいましたよ。みんなが「オーイ」と呼んでいます。はてだれかしら。ちょっと目が小さくてこぶとりの女の人。どうやら、ここのH・Rの担任の先生でした。やっぱりここは勉強部屋でした。楽しそうですね。もの音一つしないし、みんないっしょうけんめい勉強しています。きっと卒業してからも良い想い出に残りそうなクラスです。では私はこの辺で失礼しましょう。
わがクラスの特徴ある事件

H. R. 36

事件1
代講にきてくださった先生がおっしゃっていました。
「友だちが答えたときに　手をたたくクラスなんてはじめて。まるで幼稚園並み」
事件2
席替えが、行なわれました。わがクラスの親愛なる生出先生が黒板に座席表を書きました。クジで一応座席が決まりました。今度は教卓の位置が問題になりました。さきほどまで後ろの座席で喜んでいた人は、顔色が変わりました。みんなが思っていた所と逆に教卓が書かれたからです。先生はどちらを前にするか決めなかったのです。
事件3
わがクラスでは目ざまし時計がはやっています。授業中に突如として鳴りだします。また試験中にネジをまきます。

H. R. 37

倫社こと黒沢英典氏を頭として奇人変人総勢四十七名、プラスαとして金魚数匹。これがかの有名な37組の総員であります。青山学院高等部にその名をとどろかせた一味も時代の流れには逆らえず、ついに解散の日まで余すところ数週間となりました。せめてその名だけでも残そうと、最後の努力を試みているわけであります。
……アンネンちゃんサバコバオチオッタオーモリミネギシショウスケコイケトムアツコムラタチビタエーライモリアラキマルキミヨシコマツミヤザキインホッチャノンオーシマガウスワクチンジュンクボクミアオイミナコアオキクニイクドウノセアッパオオノカネゴンガママツエオンコハマノイワサキフルサワオオワハチスハマナカ……。
ヘッ!くだらねえよ。エエッ、なにがH・Rの紹介だコノヤロー。しかしなんだよな、そこいらのなんとかクラスのションベンタレどもが、やれ38はつまらねえだとか、やれブスばっかだとか言いやがるけどな。キャーキャーわめいてれば、いいってもんじゃねえんだよな。ハナタレ小僧じゃああるめえし。いいか、ウチの若いモンはそんなノータリンばっかじゃあねえんだぞ。どこがつまらねえってんだ。ひとりひとり見てみろ。こんなおかしいクラスどこさがしたってありっこねえぞ。ナニ? まとまってないだと? てやんでえ、そんな完全にまとまったクラスがあったらお目にかかりてえよまったく。ウチには、バカ

H. R. 38

は少ないよ、ヨソと違ってナ。毎日々々ヘラヘラピーピー過ごしてく前に落ちついて組のことを考えてみろってんだ。ウチの組は、苦境に立ったとき、いちばん強いと断言できるぜ。ブスなんてどこにいるんだよエエ！　眼医者へ行って来いってんだこのドメクラ！

H. R. 39

わがホームルームは、まだ二十才になられたばかり（ウソ）の話のわかる友だちみたいな石川先生を中心に、やさしくてハンサム？で、力持ちの男子十四人と、この後ろにデンとひかえる美しき乙女三十二人のクラスである。ともかく、頭のいい奴が、集まりすぎたクラス。つまり私めのようなものは、ヒジョーに、その点やりにくいのである。昼休みのわがクラスをちょっとのぞいてみよう。皆さんちゃんと席について勉強している。はたして先生が来ているのかと思えばそうでもない。時間をおしんでの勉強なのである。

しかし、遊びの事と授業をつぶすことについては、あっという間に意見がまとまっちゃうんだから、ホント不思議なクラスなのである。三時間目のお休み時間、女子は、お弁当をさっと机の上に出し、パクつきはじめるため、男子はそのあらわな姿を見るに忍びなく、席を立ち去るのも、わがクラスの一面である。